

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00728

研究課題名（和文）夜間中学における日本語教育の意義と可能性

研究課題名（英文）The Significance and Potential of Japanese Language Education in Night Schools

研究代表者

高橋 朋子（Takahashi, Tomoko）

近畿大学・グローバルエデュケーションセンター・教授

研究者番号：30635165

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、夜間中学が成人移民に行っている日本語教育の意義と可能性を問うものである。4年におよぶ2つの中学の参与観察やインタビューを通して、確認できた意義として次の点が挙げられる。夜間中学の教育は、単なる語学教育にとどまらず、1)自己表現を行い、2)社会とつながり、3)自分の経験に意義付けを行い、4)多様性を受け入れる力を育成していることが明らかになった。これは、成人生涯教育が実施されていたといえる。また、これらの教育は欠けている日本語能力を身につける補償教育の機関ではなく、日本で生きていくための力を育む人間教育の場であることも明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で次の点が明らかになった。1つ目は、夜間中学で学ぶ外国人は、ここで日本語教育だけでなく、日本社会で生きていくための力を身につけていることである。具体的にいうと、自分の経験のもつ意味やそれをクラスメートと共有する意義、来日の理由や日本と自分の国の関係性を学び、自分は今後どのような人生を生きていくのか、自分自身に問う力である。2つ目は、夜間中学の教師は日本語教育の専門家ではないため、より充実した日本語教育を実施するためには、大学や日本語の専門家との提携が求められるということである。現在、移民の言語教育は夜間中学や地域の教室が担っているが、社会全体の問題として捉える必要性を再認識できた。

研究成果の概要（英文）：This study explores the significance and potential of Japanese language education provided to adult immigrants in evening schools. Through four years of participant observation and interviews at two middle schools, several key findings were identified. Firstly, the education offered in evening schools extends beyond mere language instruction, facilitating 1) self-expression, 2) social connectivity, 3) the attribution of meaning to personal experiences, and 4) the development of an acceptance of diversity. This underscores the role of evening schools as institutions of adult lifelong education. Additionally, it was found that these educational programs function not as compensatory institutions aimed merely at enhancing missing Japanese language skills, but as holistic educational environments fostering the competencies necessary for living in Japan.

研究分野：社会言語学

キーワード：夜間中学 移民の言語教育 成人教育 アンドラゴジー

1. 研究開始当初の背景

現在、夜間中学で多くの外国人労働者や研修生およびその家族が日本語を学んでいる。これまで、夜間中学は、主に「戦争や貧困による義務教育未修了者」や「不登校の若者」、「戦前に来日し、通学できなかった在日外国人」のための学習の場として捉えられてきた。ところが、1980年代以降、いわゆるニューカマーと呼ばれる中国帰国者、インドシナ難民、国際結婚や労働者とその家族、そして2000年以降は研修生やその家族らの来日が相次ぎ、彼らの日本社会への適応の受け皿となってきた。

日本には現在44校(2024年4月)の夜間中学があり、図1にあるように、学習者の8割を外国籍の住民が占めており、国籍も多様化している(文科省2021)。また、定住者の資格を持たない人々が70%を占めている。年齢を見ると、60歳以上が28%、15~19歳、20歳~24歳がともに15%となっており、年齢層も非常に幅広い。図2が表しているのは、彼らが夜間中学に通う理由である。最も多いのは、「読み書きができるようになりたい」、次に「日本語が話せるようになりたい」と続いており、日本語の習得を上位に挙がっていることがわかる。

国籍		人数
日本籍		351人
外国籍	中国(799人)	1498人
	韓国(284人)	
	ベトナム(101人)	
	ネパール(97人)	
	フィリピン(69人)	
	タイ(29人)	
	台湾(29人)	
	その他(90人)	

図1 生徒の国籍別内訳

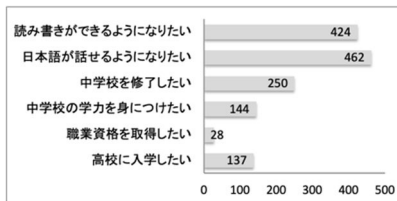


図2 夜間中学に入学した理由

一方、中学の教員側からみると、以下のような問題点がある。まず、そもそも教員は中学の教師免許を持つ教科を教える教員であり、日本語教育の専門家ではない。そのために効率的な日本語教育の方法はもちろん、外国籍生徒への対応などについて不安を持っている。また、生徒の多くは英語以外の言語(例えばネパール語やベトナム語)の話者が多く、ほとんどの教員はそれらの言語の運用能力を持たないため、初期の段階で生徒との意思疎通が困難である。さらに、中学では、指導要領に定められた教科学習を行うべきであり、時間割が柔軟ではない、などである。つまり、夜間中学は外国人生徒を受け入れるための十全な体制が整っているとはいえない状態なのである。

端的に言うと、現在の夜間中学は、生徒が求める日本語中心の教育と学校が提供できうる教育(学齢期の日本人生徒を想定した)の間にギャップが存在しているにもかかわらず、そのギャップを埋める手段がないまま課題のみが山積み続けているのである。今後、外国人住民の長期定住化が進み、外国籍の生徒の急増が必至と言われているなか、早急な教育体制の整備が求められているといえる。しかし、実際に夜間中学でどのような日本語教育が行われているのか、生徒は何を学んでいるのか、教員はどのような思いで教育を行っているのか、など夜間中学の学校生活についてはまだまだ深く検討されるに至っていない。課題を解決し、夜間中学の立ち位置を明らかにするには、まず彼らの学校生活を知る必要がある。日本語教育に焦点が当てられていないにもかかわらず、なぜ多くの外国人は夜間中学に通い続けているのだろうか。夜間中学は彼らにとってどのような存在価値があるのだろうか。

2. 研究の目的

本研究では、夜間中学を単なる学習の場ではなく、「言語学習や他者とのコミュニケーション活動を通して生きる力を獲得する新しい教育の場」と捉え、その意義と可能性を検証する。目的は2点である。1)夜間中学における言語教育の適切なカリキュラムを作成し、そこでの学びを観察する。2)1)で確認された学びが、学習者自身や教師、場の参加者に与えている影響をエンパワーメントの視点から捉え直し、夜間中学が外国人にとって「生きる力を獲得する場」となりえるかを検討する。本研究は、夜間中学が持つ外国人への教育の可能性を確認し、その発展を目指すものである。

そこで、本研究では、生徒たちは夜間中学で何を学んでいるのか、学校が抱える課題は何かを検討し、よりよい日本語教育のあり方を探ることとした。

3. 研究の方法

本研究では、研究目的の遂行のために、週に1回定期的な学校参与観察を行った。2019年までは大阪府東大阪市にある長栄夜間中学(2019年市の政策により統合され、廃校となる)に通ったが、その後コロナの影響を受け、参与観察を断念した。2021年より、同じ東大阪市にある布施夜間中学において再び参与観察を開始した。間接的参与観察者の立場で、主に日本語の授業を中心に観察した。これは、教室の後方に座り、授業の流れを妨害しないように観察するものであるが、質問があったり、生徒が困ったりしているときは、席を立って生徒の机に移動することもあった。また、担任から授業の感想や意見を求められたときは、前に立って話をするこ

った、それと並行して校長、担当教員、生徒たちへのインタビューを行った。インタビューを行った生徒は、ネパール、中国、フィリピン、韓国の出身者である。授業以外にも学校行事（夜間中学フェスティバルや卒業式）に参加し、生徒たちの様子や学びを観察した。また職員研修で、観察した気づきのフィードバックや他府県の夜間中学の観察の内容を紹介するなど、積極的にアウトリーチ活動も行った。また報告者が担当する大学の講義（日本語教員養成課程）に夜間中学の生徒を招き、日本人大学生との交流も行い、双方にとって大きな学びが観察された。

2つの学校の生徒の内訳は次のようになっている。

4. 研究成果

研究成果として明らかになったことには、大別して2点ある。これまでに発表した高橋(2019、2020a、2020b、2020c、2022、2024)、Takahashi (2023)を総括して以下のようにまとめ、報告とする。

- 1) 夜間中学が行っている日本語教育の意義の再確認
- 2) 夜間中学が抱える課題の再発見

まず、夜間中学が行っている日本語教育の意義を再確認したことである。それは、日本語を教えるという単なる言語教育ではなく、言語をツールとして「日本社会で生きるための力」を育てていることである。これは、義務教育で行われている知識の教授(フレイレ 2011)とは異なり、移民として「日本社会で生きていく」ために必要な力のことである。その力の育成のために、授業では、次のような活動が学びの中心に据えられていた。自己を表現する、他者を認めて受け入れる、社会とつながる、の3点である。

授業の一例を紹介する。ある授業では、ネパール人生徒の「たのしみにだよ なぜゆと きゆるもらえる にちです」(楽しみです、なぜかという給料がもらえる日だからです)という作文を教室で共有し、皆が感想を述べるという活動が行われていた。感想からは、家族と離れて暮らす日本での寂しさや仕事の困難さ、日本で給料をもらうという自己達成や将来への展望などが観察された。教員が日本語の文法の間違いを一切修正することではなく、思いや経験を伝えることを優先した授業であり、生徒たちは積極的に自分の経験や思いを発言し、共有し、相互に寄り添うという活動を行っていた。この授業には、成人教育(Sharan B. Meriam & Laura L. Bierema (2014))の理念がその根幹にあり、「経験を語り、その経験に意味付けをして社会とつながる」活動であるといえる。Meriam & Bieremaによれば、「成人は多くの経験を持っており、それをリソースとして主体的に学んでいく存在である。したがって、授業は、一方的な知識の伝達ではなく、課題に向き合い自分の経験に照らし合わせながら、生徒自身がその答えを導き出すものでなければならない」と述べており、その実践の重要性と難しさを主張している。参与観察データからは、多様な国籍を持つ生徒たちが自分の経験を共有することで、日本社会で生きていこうとエンパワーされる様子が数多く観察された。しかし、夜間中学において、すべての教員がこのような実践を遂行できるわけではない。そのための校内研修のありかた、教材研究、教員のピリーフの転換の必要性についても再考することとなった。

また、日本語以外の授業で行う活動を通して、日本社会や世界の国々に接触し、その理解を深めていることも明らかになった。例えば、社会の時間では外国人が移民として来日し、就業する背景やその課題を話し合ったり、先輩を講師として招き、日本社会と自国との相違点を議論したり、日本地図に訪れたことのある地域を見つけ、歴史や特色を調べて発表したりという活動が行われていた。授業は、日本語が中心であるが、理解を深めるために時折、ネパール語や中国語、韓国語や英語が媒介語として使用されることもあった。例えば、「美術館」がわからない中国人女性に、教員が「メイスーグアン」と中国語で伝えると、ネパールやベトナムの学生も「メイスーグアン」と復唱するという光景がよく見られた。それがネパール語やベトナム語でもあっても同様で、仲間の言語を学ぶ、貪欲に知識を吸収する姿勢があった。教室はまさしく多言語多文化の世界として機能していたともいえる。むしろ、教員は積極的に多言語を使用していたと思われる。外国人教員は、自らも日本語学習者であった経験をいかし、複雑な文法を直接教授法ではなく、彼らの母語を使用する間接教授法を使用することで、生徒の理解を助けていた。

さらに、夜間中学には昼間の中学と同じように、多くの年間行事がある。運動会や遠足、生活発表会などである。また近隣の夜間中学と合同で行う祭りもあり、そのために多くの時間を練習にあてている。生徒たちが協力して作品を制作したり、ダンスの練習をしたりして本番に望む様子が観察された。日本の学校文化を体現しながら、協力することの大切さや、集団が持つ力を理解していたと思われる。日本社会で同国の友人間しかネットワークがなく、また職場でも日本語を話したり、友人になってプライベートで時間を過ごしたりという経験がほとんどない生徒たちにとって、このような行事にむかうプロセスは、息抜きでもありと同時に、自分がコミュニティの中の一員であることを実感する機会であったともいえよう。

夜間中学での生きられた世界を一言で描写するならば、ここは単なる言語学校ではなく、「クラスメートとともに過去の多くの経験や思いを語り、また新しい経験や実践、知識を積み重ね、明日からもこの日本社会で生きていこうという希望を見つける場所」といえるのではないだろうか。

次に、それまで可視化されなかった課題の発見である。ここでは課題を2点とりあげる。

1 点目は、日本という国がどのように外国人を受け入れ、どのように彼らとともに生きていくのかという方向性がまったく見えないこと

適切で効果的な日本語教育の不在

順に説明を行う。まず、日本という国がどのように外国人を受け入れ、どのように彼らとともに生きていくのかという方向性がまったく見えないことについて述べる。受け入れ体制の不備や歪みが、彼らの学びに影響を与えていることがわかった。例えば、この学校では(一般的に、と言えるだろう)生徒の欠席や退学が多い。入学者名簿にリストがあるものの一度の登校も叶わなかったものも多い。その理由は、生徒自身にあるわけではない。「(多くの外国人が)勉強しようと思って入学したのに、仕事で来られないんですね。そんな人ばかり」という長栄夜間中学の教頭先生の言葉は、外国人労働者受け入れ制度とは名ばかりで、日本社会の受け入れシステムに欠陥があるということを示している。「外国人を受け入れるなら、ちゃんと日本語教育の場を設定して、学べるようにしないと」(同上)ということばは、夜間中学という現場で、日本の職場や生活で困難を抱える外国人生徒ひとりひとりの苦悩と向き合ってきたからこそその思いであろう。日本において、移民に対する日本語学習の重要性がおざなりにされている。

次に、適切で効果的な日本語教育の必要性である。前述したように、生徒の思いをそのまま受け止める授業の一方で「正確で文脈に応じた日本語運用能力」の育成については検討の余地があることは否めない。日本語学校や大学などの教育機関で、留学生に授業を行う日本語教員は、外国語として日本語をどのように教えるかというスキルや技術を身につけており、効果的に享受するためのノウハウを承知している。つまり、短期間である一定のレベルにまで日本語能力を引き上げることがある程度可能であるといえる。しかし、夜間中学においては、必ずしもそのような結果を得られない事例が散見された。一例として夜間中学を卒業したフィリピン人の女性生徒2名を挙げたい。彼女らは卒業後の進路に高校を選び、外国人生徒のための日本語授業も受けながら3年後に卒業した。が、高校卒業後の進路は、専門学校でも大学でも就職でもなく、日本語学校であった。夜間中学を入れて約4年の学校生活は、彼女らを高等教育に導くには不十分であったことを示している。その原因は複合的なものであろうが、彼女らおよび教員のインタビューから明らかになったことは、初期段階での日本語教育の不完全さであった。つまり、初期の日本語学習がその後の進路を規定する要因になりうるということだ。彼らにとって初めての日本語学習の場となる夜間中学での日本語教育のありかたについて考えるべきではないかという疑問が生じた。資格のある日本語教員、適切に組み立てられたシラバスやカリキュラム、および生徒のニーズに合った教材の選択がおざなりにされている。

そこで比較検討を行うためにアメリカ、カリフォルニア州ロサンゼルス Adult Virtual School で移民に対する英語教育、ジョブトレーニングの観察を約10ヶ月にわたって行った。ここでは、徹底的に文法が重視され、「正しく、適切な」英語を使用する授業が無料で展開されていた。教師は、「正確で文脈に即した英語を使用する」ことの重要性を何度も説き、生徒の学習に対するモチベーションが希薄になったときは、「あなたの英語では給料の高い仕事は得られない。よりよい給料がほしいなら、英語の力を伸ばすしかない」と生徒をエンパワーしていた。また、授業の内容は、意味のない教室ディスコースではなく、社会をそのまま教材とした内容重視のアプローチ(content based approach)であった。学習者は学びながら、その内容(補助金のもらい方、市のリソースの利用の仕方など)を明日の生活に応用することが可能になっていた。しかも無料で、どこでも、誰でも、いつでも、いつまでも学習することが可能であった。このように成人教育が専門化し、言語教育の場が整備されているアメリカと比較することによって、日本の成人移民への言語教育が抱える課題がより明確に浮き彫りになったと言える。

結論として、日本が抱える課題は、

移民が学習する公式な教育機関がないこと、そのため夜間中学に生徒が集中している、

教科の教員である中学の教員は日本語の専門家ではなく、効率的で適切な日本語教育が遂行されていないこと、

を受けて、学習者と教員の間日本語教育に関するずれが生じていること、

移民が日本語を学ぶことの重要性を、政府、職場など社会が認識していないこと

の4点である。これらは独立して存在する要因ではなく、相互に絡み合い、より状況を複雑で困難なものにしている。どこからでもいい、まずこれらの課題の解決に早急に着手すべきであろう。

このように、4年にわたる国内およびアメリカの参与観察、インタビューおよびその分析や考察を通して、当初の目的である夜間中学における日本語教育の意義と可能性、そして課題が明らかになったと考える。この課題を次へとつなげ、より多くの外国人住民が等しく日本語教育を享受し、その日本語能力を活かして就労したり、社会に貢献したりできる社会づくりに貢献していきたいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高橋朋子	4. 巻 23
2. 論文標題 学習者の多様な学びを支える日本語教育：夜間中学で学ぶ外国人生徒の事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal CAJLE (Canadian Association of Japanese Language Education)	6. 最初と最後の頁 43-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋朋子	4. 巻 56
2. 論文標題 コロナ禍と異文化間教育	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 異文化間教育	6. 最初と最後の頁 1 - 14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋朋子	4. 巻 10(2)
2. 論文標題 夜間中学外国人生徒との交流による近畿大学生の学び	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近畿大学教養・外国語教育センター紀要	6. 最初と最後の頁 165-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋朋子	4. 巻 18
2. 論文標題 外国人住民が社会に求めるものー中国にルーツを持つ子どもたちの中国語教育ー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国語教育	6. 最初と最後の頁 25-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋朋子	4. 巻 2019
2. 論文標題 学習者の多様な学びを支える日本語教育	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Canadian Association for Japanese Language Education	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 高橋朋子
2. 発表標題 学齢期を超えた移民の言語教育を考えるーアメリカのアダルトスクールの事例から
3. 学会等名 言語文化教育研究会第95回例会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 高橋朋子
2. 発表標題 夜間中学と日本語教育ー学齢を超えて来日した外国人の日本語学習
3. 学会等名 Japanese Studies Association in Australia International Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高橋朋子
2. 発表標題 誰も取り残さない社会を考える 外国にルーツを持つ子どもたちの事例から
3. 学会等名 天理大学人権開発セミナー
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋朋子
2. 発表標題 SDGSを考える 移民と教育
3. 学会等名 オール近大でパンデミックを乗り越えようSDGsセミナー
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋朋子
2. 発表標題 夜間中学における外国人生徒の学び
3. 学会等名 異文化間教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋朋子
2. 発表標題 外国人住民が社会に求めるものー中国にルーツを持つ子どもたちの中国語教育ー
3. 学会等名 中国語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋朋子
2. 発表標題 学習者の多様な学びを支える日本語教育
3. 学会等名 Canadian Association for Japanese Language Education (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 高橋朋子 (村田晶子、神吉宇一 編著)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 232
3. 書名 日本語学習は本当に必要か	

1. 著者名 Tomoko Takahashi (Editor: Keiko Hattori, Makiko Shinya, Kurie Otachi)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Lexington Books	5. 総ページ数 196
3. 書名 Language Support for Immigrants in Japan Perspectives from Multicultural Community Building	

1. 著者名 高橋朋子 (坪谷美欧子 編著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学術出版	5. 総ページ数 128
3. 書名 郊外団地における外国人住民の社会的統合	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------